

ギアリンクス便り 第2号 2003年3月発行

〒505-0051 岐阜県美濃加茂市加茂野町鷹之巣 343

ホームページ www.gialinks.jp

代表取締役 中田智洋 (株)サラダコスモ

取締役 大西 隆 (有)セントラルローズ

取締役 桜井芳明 桜井食品(株)

取締役 渡辺好弘 チュウノー食品(株)

取締役 加藤孝義 (株)岐孝園

監査役 渡辺基成 渡辺会計事務所

第1回増資手続きのお礼

皆様のご支援によりまして新たに50名の株主による1100万円のご出資を頂くことが出来ました。新株主の皆様ありがとうございました。従来の資本金2550万円が3650万円になったわけです。当社としては引き続きご出資いただける方を募集し、最終的に1億円の資本金にして、現地に農場を取得する資金に充当すべく計画していますのでお知り合いの方等ご紹介いただければ幸いです。

アルゼンチン現地調査のご報告

株主の皆様のご支援ありがとうございます。当社は岐阜県の食糧確保計画に沿って民間ながら一助になれるべく、平常時の安全な食糧開発と緊急時の食糧確保を目指して活動をしています。今回は去る2月8日から15日にかけてアルゼンチン、パラグアイ、ブラジルの現地調査に出かけましたので以下ご報告を申し上げます。

新聞等で先刻ご承知のことと存じますが昨年12月にアルゼンチンが海外で発行した国債等の返済に滞りが発生し、IMFや米国を初めとする諸国に金融支援を依頼したもののアルゼンチン側の将来計画に対する検討が十分でない事などの理由で直接的な援助がされず日本を含めて各国の債券購入者にたいして債務不履行の状況となっています。その後アルゼンチンの通貨であるペソが従来は米国ドルと1対1での交換レートで、現実的には市中の買い物を米ドルで出来ていたものがペソを切り下げる目的でペソでの流通に統一され、すべての銀行口座が預金引き出し制限

によって1週間に250ペソまでの引き出しとなり、今後18ヶ月は継続することとなりました。報道だけでは現地の情勢の把握が十分ではないということで、農場調査を兼ねて3ヶ国を訪問しましたのでレポートします。

8日朝アルゼンチンのブエノスアイレス空港に着。直ちに現地でシクラメンを栽培している安次富(あじふ)さんという沖縄出身の農家さんに現地事情をお聞かせいただきました。この方は当社株主である中津川市の丸山さんの紹介です。安次富さんには当社が農場取得を検討しているマルデルプラタ(ブエノスアイレスから南に約450km)に住む日系人のご紹介を得ました。その後岐阜県のアルゼンチン駐在員である深谷さんと懇談しました。お二人ともアルゼンチンの経済情勢は不安定であるが、通貨の交換レートがはっきりしてくれば落ち着くのではないかとの意見でした。通貨の切り下げをすれば輸出がしやすくなるから(輸入品は高くなるが)農産物の動きに大きな変化が出るだろう。従来ブラジルから価格差を利用して切り花がアルゼンチンに入っていたが今後は入らなくなるだろう等のご意見をお聞きしました。面談終了後はマルデルプラタに移動しました。

9日朝マルデルプラタ近郊に住む日系2世の荒木さん(花卉栽培農家)と移住1世の北島さん(漁業用電気商)のご案内で現在売り物となっている農場を2ヶ所調査に行きました。

第1の農場は570haの農場です。ここはマルデルプラタからバルカルセ方面に23km地点の国道沿いにある農場です。10のなだらかな丘で構成されていて、井戸も10本ある優良農地です。

下の写真が第1の農場入り口です



農場から1kmほど離れた所にミネラルウォーターの工場があることから水質は良さそうと推測できます。この農場では大豆は3.5トン/ha当りの収量とのことでした。

第2の農場は更に北西に60kmほど行ったバルカルセ市郊外の農場です。この農場での大豆の



生産は3t/ha当りとのことですが、農場が国道から離れている関係で未舗装道路が20kmほどあり、雨が降った後のことを考えると少々難有りと言えます。いずれにしても現在は農場の売買をしても代金の受け渡し方法が大変なため購入の決定に至っていません。

10日はブエノスアイレスで岐阜県人会の新年会に参加しました。県人会の集まりには4年連続での参加ですが、経済情勢が不安定なために日本に出稼ぎに行きたいとの声が聞かれました。新年会の後、マルデルプラタ近郊で有機栽培をしているシルビアさんと懇談。有機栽培農産物の生産と流通について聞き取り調査をしました。シルビア

さんの農場へは3年前に訪問しています。大豆について現状では日本向けの品種に対する考えが現地の人々になく、大豆は搾油用、豆乳用、豆腐用という具合に用途があること自体がよくわかっていない様子でした。

この後、12日にはパラグアイに移動して、パラグアイの日本人農協を訪問。その一つラパス農協では田岡組合長他の出迎えを受けて現地事情を聞き取りしました。現在田岡組合長はラパス市の市長を兼務されている方で現地での日本人に対する信頼が厚いことは嬉しい限りです。ラパス農協の99人の日系農家だけで大豆を1万ha栽培していると聞いて驚きましたが、それ以上にパラグアイの日系農家約230人で日本全体の大豆の生産量に匹敵する13万tの生産となっている。パラグアイ全体では大豆の生産が200万tを上回っていると聞き、ただただ驚くばかりでした。

14日にはイグアス農協を訪問し、5万tのサイロを見学しました。この近くには日本の国際協力事業団による100ha規模の試験農場があり、大豆の不耕起栽培技術を確立した試験場です。大豆のみならずパラグアイに合った農産物の生産技術の向上に努力されています。この後ブラジルのサンパウロに向けて移動しました。ブラジル側の地域パラナ州は以前サントス港から積み出すコーヒー豆の一大生産地であったものが、現在ではほとんどが大豆畑に転換していました。ブラジルといえばアマゾンの熱帯雨林やコーヒー畑を想像していたのですが、見渡す限りの農場が大豆畑となっていて驚きました。

以上今回の現地調査のご報告でした。

今後の計画のご報告

会社設立以来、農場取得に向けての調査、研究をしているのみで事業の進展を見ていませんが、アルゼンチンの経済動向に注意しつつ進めていく所存です。この4月から5月にかけて現地訪問をして、農場調査と共に現地の今年収穫大豆(4月が収穫時期です)の検分と試験的輸入として大豆100トン程度の購入に向けた訪問を計画しています。